

すぎと はなぐるまず からこゆうぎす
杉戸 「花車図」 「唐子遊戯図」

二面一式表裏 明治2年(1869)推定 各縦173cm 横95cm

本作は、弘前城本丸御殿にあったと言い伝えられるもので、弘前城の遺品の杉戸として、現在知られる唯一のものです。

弘前城は、弘前藩主・津軽氏の居城として慶長16年(1611)に築城され、本丸御殿は、江戸時代から明治初年にかけて何回かの改築を経て、明治時代の半ばに取り壊されました。右下の平面図は、明治時代に作成された絵図(※1)に基づいています。※1の絵図は、既に取り壊された部分が色変わりで示され、「御一家御備」と朱書きされており、御殿の最終的な姿を記録したと考えられるものです。当館所蔵の杉戸は、右下の平面図のどこかに本来の場所があったはずですが。

本丸御殿の中の様子は、断片的な記録から推測するしかありません。最も詳細な図は、寛文13年(1673)の年紀がある本丸御殿の平面図(※2)です。完成図ではなく計画図らしく、建具の種類が具体的に記載されています。慶応4年(1868)の中奥勤務マニュアル(※3)が残っており、それと比較すると、中奥については※2の杉戸位置が幕末までほぼ踏襲されています。右下の図の緑の部分の中奥で、黄色の丸は幕末の杉戸位置(※3)です。赤い丸は中奥以

外の※2の杉戸位置です。平面図の右側は藩士の詰所や台所、納戸等で、杉戸より簡素な戸が使われていました。以上から、杉戸は、通路の仕切りではあるが、比較的格の高い建具と言えます。

当館所蔵の杉戸は、御殿内のどこにあったのでしょうか。※3によると、中奥の杉戸は豹や象、雲雀、孔雀といった動物、鳥類が多く描かれ、館蔵の杉戸の絵柄と一致しません。また、※2には、裏面が「竹のふし」で、描画は片面だけの杉戸も多数記載されています。当館所蔵の杉戸は、他より丁寧な作りのようです。もう一つ特異な点として、幅の違いがあります。他の資料(※4)から、中奥の畳廊下の幅は一間半だったことがわかります。この杉戸は少し狭く、一間幅の廊下用です。そこで、※1の絵図から該当する幅の場所を探したのが下の推定位置図です(奥は大奥の境は※5の絵図から推測。ただし※5の時期はもとと西寄りに錠口があった)。下の推定位置図のうち、奥入口には「藤之御杉戸」がありました(※3)から、当館所蔵の杉戸は大奥入口にあったと仮定したいのですが、この位置に杉戸があったという記録は、現在のところ確認できません。視点を変えて、今度は杉戸の絵柄に注目したいと思います。

明治2年の9月から10月にかけて、本丸御殿の奥・大奥部分が改築されました(※6)。この年の10月下旬、12代藩主津軽承昭の花嫁が、はるばる京都から嫁いで来たからです。花嫁は、津軽家が宗家と仰ぐ公家の近衛家の姫君、信君(後に尹子)でした。この杉戸には、津軽・近衛両家の家紋の牡丹と本姓・藤原の藤の花、また、子宝に恵まれることを願った唐子の図が描かれています。御殿内の他のどこよりも、大奥入口にこそふさわしい絵柄です。婚礼は弘前城の大奥で執り行われました。その際の調度の記録(※7)から、婚礼の場は南座敷と推測しています。狩衣姿(※8)の花婿が、この杉戸を通して花嫁の待つ座敷を訪れる様を想像してみてください。(三上 幸子)

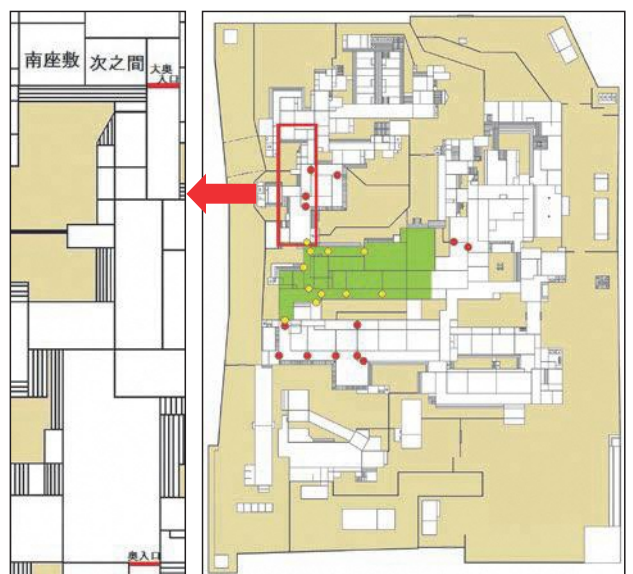
(参考資料 ※1『御本丸建物之図』(TK526-3、制作年不明、明治中頃か)、※2『弘前城本丸御殿絵図』(TK526-1、寛文13年)、※3『御住居書』(TK387-18、慶応4年)、※4『御座敷御住居之図』(TK387-285、慶応3年)、※5『弘前城本丸御殿絵図』(TK526-2、制作年不明、文化7年以前か)、※6『御城御用伝帳』(TK216-6、明治元~3年)、※7『御婚礼御当日御飾之覚』(TK386-5『信君様御下向ヨリ御婚礼済迄一件』所収、明治2年)、※8『御婚礼御当日一件』(※7同) 以上、すべて弘前市立弘前図書館蔵)



杉戸 花車図



杉戸 唐子遊戯図



杉戸の推定位置図 廃藩時の本丸建物平面図(図の上が北)